私の選ぶ道

昭和五三年度　五年女児

私は「ねむの木の詩」を見た時の感動が、今でもわすれられない。あのやっちゃんがだんだん明るい子どもに育っていくところがとてもすばらしかった。身よりのない子はとてもかわいそうだった。それにテレビなんかで身体の不自由な子がくん練などをしていると、私も手を差しのべたいような気がしてくる。

からだの不自由な人などは、みんなから差別されていると思います。ずっと前テレビにかたのところから手が出ているサリドマイドの男の子が出ていました。その子は幼稚園でも小学校でも、みんなにばかにされていました。

それを見て、私はその男の子がかわいそうでたまりませんでした。でもその男の子は努力して、りっぱにふつうの中学に行き、友達だってできました。

また、ぜんぜん目の見えない幼稚園の女の子も、目が見えないからといって、ばかにされていました。目を開けていても閉じている時と同じに世の中がまっ暗で、その上ばかにされるなんて、その子はどんな気持ちだろうと思います。

それから、身よりのない人は、そういう人ばかりの施設に入っていますが、やっぱりかわいそうです。それに身よりのない年寄りなど、なんだかとても気のどくな感じがします。

こういうふうに　不自由な人や身よりのない人はたくさんいます。かわいそうだけれど、ひきとるったって知らない人をひきとることはできません。だから施設で楽しく過ごすことを考えたらいいので、ばかにしたりするのはやめたらいいと思います。それに施設で働いている人もいやがらないで自分から何かやってあげたりしなければならないと思います。

不自由な人は、自分がなりたくてなったわけではないし、身よりのない人だって、自分がすきでなったわけではないのです。みんないろいろなわけがあったと思います。

私はそんな人のために、そういう施設で働きたいと思います。身体の不自由な人には、いろいろなくん練をしてあげ、いろいろ世話をしてあげたいです。身よりのない子どもだったら、毎日、その子たちと楽しく遊んだりしてあげたいです。身よりのない年寄りだったら、毎日 楽しくくらせるようにしてあげたいです。そして、私は身体が不自由でおもしろくないとか、身よりがなくていつも施設の中にいていやだというようなことなどがないようにしたいです。それから、時々、近所の人達が遊びに来てくれると楽しいと思います。そして、施設の中で学芸会などをひらいて、近所の人達をよんで、楽しく遊びたいです。

私はどんな人からも好かれ、信頼されるような人になって施設で働きたいと思います。